

(公財) 日本植物調節剤研究協会
兵庫試験地 須藤 健一

ナデシコ科ミミナグサ属の一年草。欧州原産の帰化種で、明治時代末期に横浜で見つかり、今では全国のだ端や畑、およそ日当たりの良いところであれば至る所に広がっている。秋から冬に芽生え、3月から5月頃に開花する。背丈は10cm-30cm。茎は直立-斜上し二分枝した先に集散花序をつける。葉は対生で長卵形、動物の耳を連想させ、また食用になることから耳菜草、さらに帰化種であることから和蘭とついた。ただ本種は全体に細かい毛が生え食べても美味しくはなさそう。この全体を覆う毛と、閉じている花は萼片から白い花卉が覗き、開いている花はその5枚の花弁の先端に浅い切れ込みがあることで見分けられる。

旧暦の1月7日を「人日の節句」と言い、2024年は2月16日であった。人日の節句は七草の節句とも言い、春の七草が入った七草粥を食べするという風習がある。この風習は奈良時代に中国から伝わり現在も続いている。清少納言の枕草子にこの人日の節句の前日のやりとりが出てくる。枕草子第131段。

＝正月七日に使う若菜を六日に持ってきた者たちがいた。みんな嬉しがってあれこれ騒いでいたが、そこへ子どもたちが見たことがない草を持ってきた。そこで、「この草は何というの？」と聞いてみたけれど子どもたちは「さあ・・・」と顔を見合わせるだけですぐには返事がなかった。そのうち「みなぐさだったかな」という子どもがいたので、「なるほどそうですね。耳『無』草で耳が無いのだからいくら聞いても答えようがないね」と笑った。そこへまた、たいそう愛らしい菊の大きくなったものを持ってきた子どもがあったので、つめどなほみな草こそあはれなれ あまたしあればきくもありけり

(いくら聞いても耳無草というように聞く耳の無い子どもたちばかりではなんともし方がないことではあるが、しかし大勢の子どもがいてと菊というようにこちらの言うことを聞き分ける子どももいたことよ)と歌で言ってやりたいと思ったけれど、この子どもたちに言ってもわかりそうもないからやめておいた。＝

清少納言の時代には、正月七日の若菜の習慣があったことからすると、セリやナズナに加えてハコベなども七種の若菜として採取されていたのであろう。そのなかで駄洒落交りにもミミナグサをはっきりと認識できるほどに区別されていたようである。ハコベもミミナグサも同じようなところに生える。平安時代の女房達は子どもたちに摘ませてきた若菜から、ハコベとミミナグサをどのように仕分けていたのであろうか。

今では在来のみミミナグサは簡単には見つからない。周りにはオランダミミナグサばかりである。



広 場

協会だより

試験成績検討会

- 2024年度水稲関係除草剤沖縄試験成績検討会及び拡散性試験中間報告会 (Web会議)

日時：2024年4月25日 (木) 14:00～17:00

植調第57巻 第12号

- 発行 2024年3月26日
- 編集・発行 公益財団法人日本植物調節剤研究協会
東京都台東区台東1丁目26番6号
TEL 03-3832-4188 FAX 03-3833-1807
- 発行人 大谷 敏郎
- 印刷 (有)ネットワン

© Japan Association for Advancement of Phyto-Regulators (JAPR) 2016
掲載記事・論文の無断転載および複写を禁止します。転載を希望される場合は当協会宛にお知らせ願います。

取 扱 株式会社全国農村教育協会
〒110-0016 東京都台東区台東1-26-6 (植調会館)
TEL 03-3833-1821